２０１７

第 15 回群馬県図書館大会
報告書

平成 29 年 11 月 30 日（木）

会場：群馬県立図書館

目次

全体報告……１

記念講演
「あなたは次代に何を継ぎたいか」（森田　秀之　氏）……４

第１分科会報告
「魅せる本棚、つくりませんか」……７

第２分科会報告
「利用者を増やすために図書館ができること
　―各館の広報活動や図書館行事の実践―」……１３

参加者の声……１８

※ 講師等の発言は、大会当日1回限りを前提とした発言内容を事務局及び分科会検討会で要約したものです。転載･2次利用は固くお断りいたします。

１　全　体　報　告

事業名	第１５回　群馬県図書館大会
日　　時	平成２９年１１月３０日（木）　１０：００～１６：３０
会　　場	群馬県立図書館
主　　催	群馬県図書館協会（群馬県立図書館、群馬県公共図書館協議会、群馬県大学図書館協議会、群馬県高等学校教育研究会図書館部会、群馬県小中学校教育研究会学校図書館部会）
後　　援	群馬県教育委員会
大会テーマ	未来につなげる図書館　－広げる・伝える－
日　　程 ・ 内　　容	１ 式典（１０：００～１０：３０）（群馬県立図書館　ホール） (1)主催者挨拶 群馬県図書館協会　会長　中山　勝文 (2)来賓祝辞 群馬県教育委員会　教育長（代理）　北爪　清（教育次長） (3)後援・加盟団体紹介 群馬県教育委員会生涯学習課　課　長　船引　忠雄 群馬県公共図書館協議会　会　長　松井　玲子 （沼田市立図書館　館長） 群馬県大学図書館協議会　会　長　田中　麻里 （群馬大学総合情報メディアセンター長） 群馬県高等学校教育研究会図書館部会　部会長　都丸　栄一 （群馬県立新田暁高等学校　校長） 群馬県小中学校教育研究会学校図書館部会　部会長　矢島　貢 （みどり市大間々南小学校　校長） (4)表彰式 ①優良図書館群馬県教育委員会表彰 千代田町立山屋記念図書館 ②群馬県読み聞かせボランティア顕彰 朗読と話し方　クッションの会 月・木お話しの会 坂東小オレンジの会 お話の会　チロヌップ 桐生市立新里図書館　読み聞かせの会　たかさん ③優良読書グループ表彰受賞グループ 邑楽町立図書館　オリーブ（邑楽町） ④全国公共図書館協議会表彰 寺澤　敬子（元・群馬県立図書館協議会委員）

日　程 ・ 内　容	 （千代田町立山屋記念図書館） （朗読と話し方　クッションの会） （月・木お話しの会） （坂東小　オレンジの会） （お話の会　チロヌップ） （桐生市立新里図書館　読み聞かせの会　たかさん） （オリーブ） （寺澤　敬子　氏）

日　　程 内　　容	２ 記念講演（１０：３０～１２：００） 「あなたは次代に何を継ぎたいか」 森田　秀之　氏　（株式会社マナビノタネ代表取締役） ３ 昼食・休憩（１２：００～１３：００） ４ テーマ別分科会（１３：００～１６：３０） 第１分科会（群馬県立図書館　ホール） 「魅せる本棚、つくりませんか」 講演：「図書館の仕事、たのしんでますか」 幅　允孝　氏（有限会社ＢＡＣＨ代表ブックディレクター） 第２分科会（群馬県立図書館　研修室） 「利用者を増やすために図書館ができること ―各館の広報活動や図書館行事の実践―」 講演：「機会をフル活用するＰＲ～連携で広げよう図書館の輪～」 嶋田　学　氏（瀬戸内市民図書館　館長） 事例発表①「図書館ＰＲに必要な視点　～普通に当たり前を伝える～ 」 星野　盾　氏（沼田市立図書館　奉仕係長） 事例発表②「地域と大学をつなぐ場に ～図書館でこんなこともやってます！～」 柘植久美子　氏（群馬大学総合情報メディアセンター中央図書館 専門職員） 事例発表③「高校図書館における小さな工夫～広報を中心に～」 新井　玲子　氏（群馬県立伊勢崎興陽高等学校　司書専門員） 織茂真紀子　氏（群馬県立玉村高等学校　学校司書）
参加者数	延べ人数：２９９人（式典･記念講演１４９人、分科会１５０人） （２８年度実績１７４人　　１０５人　　６９人）
評　　価 反　　省 そ の 他	○森田秀之氏による記念講演は、全国さまざまな図書館の開館支援を行っている森田氏ならではのお話を聞くことができた。森田氏が行っている新しい試みや新しい図書館の構造やあり方についてのお話、さまざまな本の紹介などもあった。参加者アンケートには、「とても良い刺激をもらえた講演だった」「図書館としてできることを実践する手がかりをもらいました」などの意見が多く寄せられた。 ○第１分科会では、講師である幅氏の軽妙な話術での講演に、参加者たちも熱心に講演を聞いていた。また、５つの公共図書館が、それぞれの図書館で展示しているブックトラックを紹介し、それについて幅氏がインタビューをしながらコメントを述べていくというワークショップが行われた。参加者たちにとって大変有意義な時間になったようである。 ○第２分科会は、講師の嶋田氏のバイタリティあふれる語りに、参加者も引き込まれたようだった。また、群馬県内の公共・大学・高校のそれぞれの図書館での実践発表では、公共図書館の核心に迫るお話や、高校の小さな工夫の積み重ねの実践など、参加者たちにとって参考となるお話をたくさん聞くことができた。 ○当日、上毛新聞が取材に訪れた。

第１５回　群馬県図書館大会記念講演（概要）

「あなたは次代に何を継ぎたいか」

森田　秀之

このような機会をいただきましてありがとうございます。

もともとは東京のシンクタンクと呼ばれている業界で仕事をしていたが、１６年半勤めて独立し、今は軽井沢に住んでいる。まずはなぜ軽井沢に住むことになったのか自己紹介から始めたい。

２００５年、愛知万博でインターネット上のパビリオンである「サイバー日本館」のディレクターを担当した。万博のテーマは「地球環境を守る」。壮大なテーマである。どうしたらよいのか分からないので、有識者に話を聞いて、パビリオンで何を伝えるべきかを探った。かなりの数の有識者から情報を集めた。返ってきた言葉は、「もう地球温暖化は止まらない」「地獄の門をくぐった」「たとえ大昔の生活に戻したとしても百年は灼熱地獄だ」「毎年未曾有の台風が来る」など悲観的な内容ばかりだった。「私たちができることは、木を植えて、田んぼをなくさないようにして、洪水から免れることだ」という前向きな言葉もあったが、「でも人口が増えるので食べ物が必要になる。結局は食糧難になる」というものだった。どうしたらよいか悩んだ末、この危機的状況を「子どもたちに伝えよう」と思い立った。まずは、子どもたちに向けて、新聞仕立てにして発信するためのコンテンツを作った。しかし「内容がよくても、子どもたちは興味がなければ読まない」と企画担当者から言われた。そこで、ゲームの手法を取り入れることにした。仮想世界で「持続可能な少年少女団」というものを立ち上げ、入団してホームページを１ページ読めば１０ポイントもらえる、という仕掛けを作った。すると、ポイントがたまることが面白くて、子どもたちが読んでくれた。ポイントが貯まるとページが変わる、さらにポイントを貯めるとピンバッジがもらえる、というように、子どもたちの興味を引き付ける工夫をした。やがて、子どもたちは、仮想の世界だと思っていたものが現実の世界につながっている、ということが分かるようになってきた。このネットワーク上のパビリオンを利用して、ポイントを多くためた人に、先着で、本物のパビリオンに優先入場できるという仕掛けにした。小学校５年生をターゲットにしていたが、幼児から高校生まで広く来場してもらうことができた。実際にパビリオンに来ていただいたのは２００万人。多くの方がこの仕掛けを通じて、地球環境に興味を持って来場してくれた。反響が大きく、手紙やメールがたくさん届いた。

その後、自分自身が、異常気象や食糧難、エネルギー問題から目を背けることができなくなってしまった。そして「地方がいい」と思うようになった。地方は、食料を作っている場所である。エネルギーについても、東京に住んでいると選択肢がないが、地方にはいくつもある。地方がいい。

はじめは、地方に住んで東京まで新幹線通勤をしようと考えていた。そのうち勢いがつきすぎて会社を辞めてしまった。そして２００７年に移住、独立した。何の当てもない中、「Ｒｅ：Ｓ」という雑誌が後押しをしてくれた。「Ｒｅ：Ｓ」の編集長は藤本智志さん。藤本さんは秋田県のフリーペーパー「のんびり」の編集も手掛けている。著書には「魔法

をかける編集」があり、その中では、マイナスをプラスに変えていく考え方が書かれていいた。「のんびり」は、相対評価ではなく絶対評価を表現したかったと言っていることが印象に残った。

そして、移住して１１年目。食糧問題、エネルギー問題を解決する、という理由で移住したので、自分自身が実験台になっていると考えている。３年目に田んぼを２枚借りた。１年目は低農薬だったが２年目からは無農薬にした。木質バイオエネルギーが一番いい。太陽光は半導体を作るのにものすごいCO_2を出している。また３年目には樵（きこり）さんに弟子入りもした。田んぼや樵をやっているうちに、それらの技術や知識を学ぶことがすごく面白くなってきた。やがて、誰もが学べる、学びの場を作るということを仕事とするようになっていった。

学びの場を作るという仕事として、公共図書館員のタマシイ塾を立ち上げた。全国で学び合うことができる、実費だけでやっている組織である。山梨県ではワインツーリズムを立ち上げた。ワインを作る場所のことを知っていただくことが目的である。そんなことをやっているうちに、地方を活性化するお手伝いをするようになった。

地方で何ができるか。地方は食べ物がおいしい。だからフードデザイナーと協同することにした。また、エコミュージアムというものを勉強している。エコは「暮らし」「生活」という意味。エコミュージアムとは、あるエリアに対して、遺産、特性、昔の話を語ってくれる方、そこに住んでいる人たち、そういうものを一つのミュージアムと見立てる、という考え方である。中心にあるのは、集合的記憶である。地域というものは記憶でできている、という考えである。

「仙台メディアテイク」の立ち上げでは、初めて図書館の作り手になった。「川口市メディアセブン」図書館の機能が入っている。４００席を作り、加えて有料席を設けた。この雑収入でイベントを打った。

「島根県立博物館」の開館のお手伝いでは、ダブリンコアの構造を用いたデータベースを作った。

「武蔵野プレイス」では、入口は図書館という雰囲気ではなく、だれでもおいでよ、という雰囲気にした。裏側にはカフェを設けた。カフェの売上金でカルチャーイベントを立ち上げるようにした。また、読まない本を貸さないという考え方を取り入れた。たくさん借りていった人が読まない本は、誰にも読まれない本である。誰にも読まれない本を出さないという考え方でやった。図書館にカフェが併設されていると聞くと、図書館が騒々しいのではと思われるかもしれないが、カフェの音は暗騒音といい、気になる音を精神的に消してくれる効果がある。少し音が流れていると、ページをめくる音やキーボードを打つ音が消える。暗騒音がいいのは、子供を連れている利用者が、子供に向かって「静かにしなさい」と言わなくて済むことである。もちろん静かな場所がないわけではない。静かな場所とそうでない場所を棲み分けるという考え方でやる。また、司書さんと一緒にオリジナルな配架を考えた。キーワードは「連鎖」。一つのことから、次のやりたいことが見えてくる仕掛けを作った。本棚はいっぱいに詰めない。向こう側がわざと見えるように隙間を空けて配架した。さらに、地下の中高生がたむろしている場所を何とかしたい、という課題があった。中高生に聞き取り調査をしたところ、図書館には行きたいけど塾があっていけない、という返答があった。そこで、宿題をしてもいい、本を読んでもいい、軽食を

食べてもいい、というように何でもできる空間をつくった。すると利用者が増えた。

「あなたは今幸せですか」という質問をして歩いた人がいる。幸せだと答える理由は「他者を信頼しているから」「何かに没頭しているから」などだった。これらは幸せの「例示」である。例示を聞くことによって、自分はどうなのか考える。「例示」が大切だと思う。では、暮らしの例示はどこにあるのか。それは、図書館にあるのではないか。善悪、価値観、一般常識、大多数の意見、少数派の見解、現在も続けられていること、もうやっていないこと、これらの例示は図書館にある。例示を本の展示で示したい。

宮崎県都城市のショッピングモールの開発に携わっている。典型的なショッピングモールの建築を生かそうと思っている。パリのショッピング街はふらふらっとただ歩いているだけで、ふと、いいものに出会うことができる。これを生かしたいと考えた。入口に少しだけ展示して、中にはどんなものがあるのだろうと興味を誘うような「例示」をする。もっと知りたいという思いが高まると、中に入って行って、椅子に座って、やがて自発的な活動が始まり、連鎖的な空間を作ることができる。資料提供には、要求論と価値論という考え方がある。図書館員が選んだ資料を重視するのは価値論。利用者が必要とする資料を重視するのは要求論。図書館員と利用者の間にあるズレができるだけ少なく、利用者が的確なリクエストをしてくることが望ましい。

新しい図書館作りの基本理念は「一人一人が大事なものを見つけていくために」である。思い出、あこがれの人、すてきな場所を大切にしたい。私にとっての大事な場所は田んぼである。田んぼに関わっているといろんな人から声をかけられる。例えば焼畑のやり方を教えてくれる人がいる。しかし、２０年後、３０年後、そういう人はいなくなるだろう。農家の方の感覚や感じ方、感性を取り戻すために、農家の方の暮らしぶりを見ることにした。農家の方が集まる温泉に行って話を聞くと、ミュージアムを作りたいという声が聞こえてきた。そこで「朝ミュージアム」を開くことにした。駅の待合室のようなところからでも様々なことを発信することができる。Sight、Museum、Library がつながっていくことを SML 連結と言っている。美味しいものを食べた、もうちょっとこうしたいな、が未来につながる。

石巻市で街を再生するお手伝いをしてほしいと頼まれた。「震災にあって大変でしたね」というのではなく、一歩ずつ前を見ていくことができるようなことをしたいと思った。『スローシティ』という本がある。人が幸福に暮らす場とは何かということを問い続け、その答えを探る小さな町がすごく元気になっていくことを伝えている。石巻では、記憶を集めて伝えていこうと考え「５０の物語」を作った。自分たちの街を紹介する冊子を作ったことで、住人は自分たちの街を誇りに思うようになった。図書館や公民館もない地に、憩いの場を作り、集合的記憶を展示した。それをデータベースに入れて保管した。

私も含め、人は、貴重な記憶や大事なものを、日頃忘れてしまっている。思い出したり表現したりする時間が圧倒的に足りないのである。『懐かしい時間』という本は NHK テレビ視点論点をまとめたもの。私にとって大事な本。何回も読んだ。人は、記憶によって育てられ、導かれて、自分にとって大切なものを手にしてきた。記憶を大切にしていきたい。

２－１　分　科　会　報　告

分科会名	第1分科会
日　　時	平成29年11月30日(火)13:00～16:55
会　　場	県立図書館３階ホール
テ　ー　マ	魅せる本棚、つくりませんか
開催趣旨	多くの図書館が用いている本の並べ方（日本十進分類法）は、管理のしやすい優れたシステムですが、もっと本の面白さを伝え、利用者と本を近づけるためには、どんな工夫や仕掛けが必要でしょうか。 思わず立ち止まり、手に取ってみたくなるような本の「魅せ方」や、また来たくなる図書館づくりについて、ユニークな実践がテレビ（情熱大陸）等でも紹介されたブックディレクターの幅允孝氏をお招きしてお話を伺うとともに、県内の数館が考えたサンプル本棚に講評とアドバイスをいただくワークショップを通じて、ニーズを捉えるポイント、核となる考え方等について理解を深めたいと思います。
日程・内容	12:30～13:00　受付 13:00～13:30　サンプル本棚展示（時間調整） 13:35～15:35　講演　「図書館の仕事、たのしんでますか？」 幅允孝氏（BACH代表　ブックディレクター） 質疑応答 15:35～15:55　休憩 15:55～16:50　ワークショップ(サンプル本棚への講評・アドバイス) 16:50～16:55　まとめ及び事務連絡
参加者状況	合計９１人(一般参加者74人、講師1人、ｽﾀｯﾌ16人)
係　分　担	講師:幅允孝氏(「BACH」代表) ワークショップ:前橋市立図書館、玉村町立図書館、桐生市立図書館、吉岡町図書館、県立図書館(発表順) 司会:黒崎(前橋市) 趣旨説明及び講師紹介:橋爪(県立) 受付:正田(伊勢崎市)、雨宮(桐生南高) 記録:原(館林市)、増田(明和町)、西田(館女高) 写真:大賀(みどり市笠懸)、多田(高崎市) 会場:小田澤(玉村町)、桑山(吉岡町)、浅野(桐生市)、市村(県立) 接待:塚越(太田市尾島)、井田(県立)、藤原(笠懸中)
配布資料	アンケート用紙
評　　価 反　　省 そ　の　他	・講師の御事情で講演開始時刻に変更があったが、参加者には先にワークショップ用の本棚を見てもらうことにし、皆熱心に各館の説明に聞き入り有意義な時間とすることができた。 ・本を手渡す相手への丁寧なインタビューから関心領域を把握する方法や、次々に興味が沸くような本の並べ方、本を手に取ってもらう環境へのこだわりなど、豊富な体験に基づく示唆に富んだ講演で、話も面白く大好評だった。 ・ワークショップも、５館がブックトラックに準備した本棚に丁寧な講評とアドバイスをいただき、説明者も参加者も満足度の高い構成とすることができた。

講演

「図書館の仕事、たのしんでますか？」

講師：幅 允孝　氏（ＢＡＣＨ代表　ブックディレクター）

自分はもともと本屋で働いていたが、なかなか人が本屋に来ない。人が本屋に来ないとすれば、人がいる場所に本を持っていこうということで、こういう仕事を始めた。

本をめぐる状況は、日に日に厳しくなっているといわれるが、そんなことはないと思う。売れている本や本屋の数は減っているが、本が傍らにあってほしいという希求は、逆に高まっているのではないか。

今日は、自分が普段どのように本棚作りをしているかということをお話しする。それを皆さん自身の職場に近づけながら聞いていただければと思う。

自分たちが本を扱うにあたって大切にしていることは、まず自分が読んでみて面白いかということである。公共図書館では「私」をどこまで出していいか悩むところであるが、やはり、自分が読んで面白いものを勧める方がいいと思う。本は、１冊置いておいても、しゃべってくれない。読んだその人が語らないと、伝わらない。今は書誌情報があふれているので、本を読んだ気になるが、人が本を届けようとするときは、あらすじでなく、読んだ人の感想がないと伝わらないと思う。

初期衝動としては、自分の好きな本を共有したいと思いながら仕事をしている。
誰でも、自分がいいと思った本を「いいね」と言ってくれると、嬉しい。しかし、自分はいいと思って勧めても、それがお節介になることがある。そのお節介が親切になる瞬間があるので、その境界をいろいろ探していく。そのためには、相手の話を聞くことを重要視している。届けたい相手が、両手を伸ばして手が届く範囲に本を配置しなければ、本は相手に届かない。

子供たちに文学を勧める機会があり、スティーブンソンの『宝島』を勧めたいと思ったが、子供たちには興味のない本であった。自分の「好き」がお節介にしかなっていない状況である。

無理に勧めても読んでくれないので、視点を変えて、子供たちの話を聞いていくうちに、尾田栄一郎の漫画『ワンピース』は読んでいるということが分かった。そこで、『宝島』と『ワンピース』の「結び目」を探り、その共通点を話していく。ワンピースに「ゼフ」というコックが登場するが、宝島にも片足のコック「ジョン・シルバー」がいることや、どちらも、史実を参考に書いているので、読んでおくと今後の展開の参考になるかもなどと言うと、子供たちも読んでみようかなという気持ちになってくる。両手を伸ばした範囲の外側にあるもの、その関係ないと思っていたものが実は関係があると思わせる「結び目」「結節点」を作ることで、本に関心を持ってくれる。

今は検索の時代で、知っているものは検索できるが、図書館のようなリアルな本を扱うところでは、知らないものに偶然出くわす機会を点在させることが必要なのではないか。そのためには、「結び目」をどうやって読み手に意識させてあげるかということを考えるようにしている。

本棚作りの例を紹介していく。

例①　サンパウロ「ジャパンハウス」

日本の文化を紹介する、ギャラリーとカフェと図書館が一緒になっている施設。ここの本棚は16ｍという横長で、縦板がなく、巻物のように本棚が展開する。したがって、「結節点」を作って少しずつ本を紹介するようにした。日本酒を売っているので、まず、日本酒の本でスタートし、お酒造りの本、発酵文化、日本料理、茶懐石の本、器の本、というように、少しずつ、横にずれて流れていくような棚を作った。見せ方も、本を開いて置いたりして、冊数よりはこの１冊という本を重視した。また、興味を持たれたのは、ビンテージブックを置いたところである。ワンク

リックでは届かない本がそこにあるということは価値のあることである。それぞれの図書館にも、そういうお宝があると思う。
紙の本を扱うとはどういうことなのかを、意識することも必要だと思う。紙の本は、電子書籍と違い、いつでも目に届くところにあるという存在感がある。また、情報の精度や責任の所在がしっかりしている。さらに、データと違い文章も書き直しがきかない、推敲された文章である。このような意識を持って、本を扱うといいのではないか。
どういう情報をネットで得るべきで、どういう情報を本から得るべきなのか、図書館の皆さんがお客さんと対話をしながら考えていくことが必要であると思う。

例②　広島県福山市「わかば塾」ライブラリー
本屋の中にある、小学生から高校生までの塾に、ライブラリーを作った。いわゆる「企画棚」であるが、テーマは先に決めないで、棚を作る前に子供たちにインタビューをした。それは、何を読みたいかの答えを聞くのでなく、本を持って行って、見せて話をしながら反応をみるもの。話をしながら、こちらが勧めたい本と、そこにあるべき本の距離を縮めていく。子供たちが、両手を伸ばした範囲の外側にあるものを大事にしながら選書した。そうして、14歳、勉強したくない時に読む本、ゲーム好きの本棚、広島カープの本棚等が出来た。

例③　高木学園女子高等学校　ライブラリー刷新プロジェクト
図書館が旧校舎で遠い。図書館をきれいにする前に、新校舎で本を手に取る機会を作ろうと、新校舎にブックトラックで屋台風のコーナーを作った。図書委員が、本を差し出すことが誉に思えるようなデザインを考えた。猫の本、スイーツ、世界を見渡す等、月１でテーマを変えている。ここでもインタビューをした。本が好きな人だけでなく、本を読まない人も本を届ける対象ととらえて、本を読む人と全く読まない人も含め、各学年５人にインタビューした。すると、女子高生はゲーム好きであるが、そのゲームは「テキスト」を読み進めるものであって、物語を自分に抽入したい思いは、今も昔も同じなのではないかと分かった。今は、その「物語」がいろいろなメディアになっているので、それをどうやって本につなげるかを考える必要がある。アニメとその原作本、その影響の本など関連づけると、女子高生も興味を持ってくれる。みんなにいいというよりは、まず、一人の読者を獲得することが、選書にとって重要なことなのではないだろうか。

例④　神戸アイセンターライブラリー
視覚障がい者のための図書ルームで、ビジョンパークという、健常者と障がい者が一緒に楽しめる場所の図書コーナー。障がい者のかたが、普段手に取らない本を選書した。全盲の方には、点字付きの絵本のほか、擦るとにおいの出る香料印刷の本や、三宮さんの『でんしゃはうたう』など音を言葉に落とした本を選書した。また、弱視の方には、コントラストのはっきりしている写真集、さわる本等を選書した。何が見えるかでなく、何を見ようと思えるのかが重要である。

例⑤　城崎温泉「本と温泉」
本棚作りのケースでなく、地域をどう結び付けるかのケースをお話しする。
城崎温泉は「歴史といで湯と文学の町」と言っているが、「文学」は記念碑しかなかった。過去自慢ではダメなので、現在の作家に来てもらってはと提案した。そして、万城目学氏に来てもらい、志賀直哉が泊まった部屋に逗留してもらった。そうして執筆した『城崎裁判』を、温泉の若旦那衆で地元出版社を結成し、地元のみで販売した。また、ゆっくり本を読みたい場所は温泉ということで、防水の紙で作り、温泉で読めるようにした。
それが好評で、第二弾として、湊かなえ氏にも執筆してもらい、ゆでガニの装丁で出版。また『注釈城崎』という『城崎にて』の注釈本を作った。これら3冊は、城崎に来ないと買えないため、とても売れている。
オリジナルのそこでしかないもの、そこでしか得られない読書体験は何かを考えることは大切なのではないか。図書館は、郷土資料など著作権が切れているもので、そこにしかないものを出版できないか、新しい試みを、頭をやわらかくして考えていければいいのではないかと思う。

例⑥　城崎文芸館リニューアル
　企画展の工夫として、「テキスト」という視覚化が難しいものを、いかに視覚化するかを考え、言葉を立体的にして展示した。

　最後に、「本棚を編集するという考え方」についてお話したい。
本棚の編集①　セグメントの再編集
　NDCに基づかないセグメントの作り方で、本屋の「旅」のコーナーを作った。地理の本だけでなく、写真集、芸術書、社会学の本、文庫、文芸書など、普段はバラバラにある本を集めた。それらが連なることによって、いい意味での違和感をどう作るかが重要である。１冊の本はただの本。しかしそれが何冊か連なることによって、とても雄弁なメッセージに成り得る。人は１冊１冊の本を結び付けたがる傾向があるので、深読みしてつながりを作ることが重要である。

本棚の編集②　そのものを置く環境を編集する
　羽田空港内「トウキョウズトウキョウ」地域別のコーナー。チェックインが早くなったため、滞留時間が短くなった。したがって、通り過ぎる人をいかに引き付けるかを考え、サインを大きくして、冊数を減らした。東北へ持っていくベスト１として宮沢賢治『風の又三郎』を置いた。なかなか手に取らないと思われる本であるが、空港という地場で、東北で風が吹いていたという世の中のシチュエーションもあり、東北に向かう人に勧めるという導線を作るという、そういう差し出し方によって本の届き方が違う。
　同じ本でも、その周辺の環境をどのように作るかによって、届き方が違う。図書館でも、すでにある本を丁寧にすくいあげ、舞台・環境を作ることで、手に取ってもらう可能性が増えるのではないか。

本棚の編集③　意外性と身体性
　本を届けるには、体が気持ちいいということが重要である。熱があると、新しい本を読む気にならない。
　東京ミッドタウン「パークライブラリー」というイベントで、ピクニックバスケットで本3冊とレジャーシートをセットにして貸し出ししている。本好きでない方も結構借りていく。本が目当てでなくても、レジャーシートを敷き、食べ物のにおいや陽射しに誘われて気持ちよくなると、本を開く。体が心地よいと人は未知をおそれない、ということである。いつもと違う環境で本を読むということを考えるのも大切である。

　図書館はアーカイブスが重要であるが、一方で、人が集まる工夫をしなければならない時代になった。図書館の床材、絨毯の種類、棚の高さ等、図書館に滞在していて心地よいと思える環境を考える必要がある。
　司書は、選書だけでなく、選んだ本の差し出し方も考えないと届かない時代になっている。逆に、そこも自分たちの仕事の領域だと考えながら仕事をすると楽しいのではないか。

「出会わせ方によって　本という紙束は　まだまだ効く存在でいられる

ワークショップ
　分科会検討委員の中でワークショップを希望した５館がサンプル本棚を作成し、幅さんの講評やアドバイスをいただく形で進められました。
○前橋市立図書館
テーマ：「出会いの本棚」（興味がなかったジャンルの本を読んでもらうため）
　コンセプトは、だれにでも目を向けてもらえる本棚。「世界の中心で愛を叫びたい人へ」
　「1人の時間の過ごし方」などテーマを決めた紙袋に数冊本を入れ、紙袋ごと貸し出す。中身が見えないため何が入っているかはお楽しみ。袋には中の本が連想できるような装飾を施した。

＜幅先生からの講評・提案＞
・福袋調の派手な袋を使う。
・棚より机に置いた方が持ちやすいだろう。
・枝のようなものに引っかけるなど、袋を手に取りたくなるような環境を考える。
・「1人の時間の過ごし方」にはブランケット、「世界の中心で愛を叫びたい人へ」にはのどの薬など、本以外の物も入れる。
・袋の色やサイズを揃える、「出会いの本棚」をロゴ化して袋に記すなど統一性をもたせる。
袋に部分的に穴を開けて中身を少し見せる。

○玉村町立図書館
テーマ：「ちょっと昔（そこ）まで行ってみませんか」
　群馬県は、富岡製糸場や上野三碑など歴史の資料が見つかった。それらを小さい子どもからお年寄りまで興味を持ってもらおうと歴史の本を集めた。本棚の上段には、はにわの写真のページを見開きで飾った。
＜幅先生からの講評・提案＞
・本棚の一番大きい面積を占めるものは、その棚を象徴するものであるということが重要であるため、見開きで飾るのは有効。
・背表紙と棚の端を揃えるときれいに見える。
・見開きの本も、手前に飾る。
・本棚のテーマのところにリード（テーマを説明するもの）が書かれているとわかりやすい。

○桐生市立図書館
テーマ：「ゆっくりしたくないあなたへ（カメラ編）～ファインダーの向こうに広がる世界を覗いてみませんか～」
　ターゲットは現役を退き、時間に余裕ができた方、豊かな人生経験を持ち、まだまだアクティブに過ごせる世代の方。仕事や子育ての引退後、新しい世界に触れ、新しいことに挑戦したくなるような本棚をイメージして作った。カメラ上級者はもちろん、これから始めようと考えている人にも写真を撮る、その先にある世界をイメージできるような選書をした。
＜幅先生からの講評・提案＞
・「この本のここにカメラに関する記述がある」ということを付箋で示すなどの工夫があると良い。
・棚の段によって階層がちがうため、それを示す小セグメントをつくると良い。
・撮りたいもの別に小さいコーナーをつくる。（花、空など）
・ターゲティングがピンポイントなので、「OVER60　せっかちな人限定」などと書くとつっこみどころができて目にとまりやすい。

○吉岡町立図書館
テーマ：「子育て中気になるアレコレ」
　ターゲットは、乳幼児～小学校低学年の子どもをもつ女性。“ほっとひといき”“こんなときどうする”“みんなはどう思っている”という３つに分けて展示した。子育て中の母親はじっくり自分の時間をとることが難しいため、項目が分かれていて途中からでも読むことができ、気軽に手に取れる本を集めた。ネガティブな内容はさけ、子育てを前向きに考えられる内容の本を選書。子育て中の母親に馴染みやすいように、ぬいぐるみなどで飾り付けた。
＜幅先生からの講評・提案＞
・小さい見出しをつくる。
・本も大事だが、ブックスタンドなどの什器を統一することも重要。

○群馬県立図書館
テーマ：「４０代の男性が熱くなるような本」

最強の〇〇、群馬を代表するロックバンドBOOWY、スーパーカー、冒険者、中二病などを、４０代男性が一度は夢中になったであろうというテーマの本を集めた。

＜幅先生からの講評・提案＞

・見出しの形やフォントが統一されていて良い。
・どちらの方向に目線を流してほしいかわかるよう、見出しに矢印を入れる。
・背表紙が黒色の本が多いため、見出しは黒以外の色にする。
・企画した人の自己紹介を展示する。
・選書本への熱い思いを語った動画などを流す。

２－２　　分　科　会　報　告

分科会名	第２分科会
日　　時	平成２９年１１月３０日（木）１３：００～１６：３０
会　　場	群馬県立図書館　研修室
テ　ー　マ	利用者を増やすために図書館が出来ること ―各館の広報活動や図書館行事の実践―
開催趣旨	図書館の課題の一つとして「利用者の減少」がある。県内の図書館でも、新着図書のＰＲや図書館関係のイベントを増やすなどいろいろな取り組みを行っているが、新規利用者の獲得には結びついていないのが現状である。 「新規」の利用者はどうすれば図書館に足を運んでくれるのか。図書館に来たことがない人に来てもらうためには、どんなイベントの実践と広報活動が効果的なのか。 「持ち寄り、見つけ、分け合う広場」をコンセプトに市民に親しまれる図書館づくりをすすめLibrary of the Year 2017大賞を受賞した岡山県の瀬戸内市民図書館館長 嶋田学氏の講演と、群馬県内の図書館での実践例を聞き、利用者を増やすために何ができるのかを考えた。
日程・内容	13:00～14:30　講演 「機会をフル活用するPR～連携で広げよう図書館の輪～」 　嶋田学氏（瀬戸内市民図書館 館長） 14:40～15:40　事例発表 「図書館PRに必要な視点～普通に当り前を伝える～」 　星野盾氏（沼田市立図書館奉仕係長） 「地域と大学をつなぐ場に～図書館でこんなこともやってます！～」 　柘植久美子氏（群馬大学総合情報メディアセンター中央図書館専門職員） 「高校図書館における小さな工夫～広報を中心に～」 　新井玲子氏（群馬県立伊勢崎興陽高等学校司書専門員） 　織茂真紀子氏（群馬県立玉村高等学校学校司書） 15:50～16:30 　パネルディスカッション
参加者状況	合計 59人（一般参加者 40人、発表者5人、スタッフ 14人）
係　分　担	講師・コーディネーター：嶋田（瀬戸内市民） 受付：飯塚（前橋女子高）・斎藤（新田暁高）・侭田（県立） 記録：柘植（群大）・佐藤（群馬パース）・鈴木（高経大）・堤（高崎健福大） 　　秋間（邑楽町立）・斎藤（千代田町立） 会場：瀬下（大泉町立）・飯島（新田暁高）・大澤（太田フレックス高） 接待：中沢（草津町立）・内田（伊勢崎高） 調整：田村（県立）・関口（県立）
配布資料	・レジュメ ・アンケート用紙
評　　価 反　　省 そ　の　他	・最初に嶋田館長に図書館の広報活動について整理していただいたので、問題意識をもってその後の事例報告を聞くことができた。 ・パネルディスカッションについても、活発な意見交換が行われ、各館の活動内容や、イベント・広報活動の意義・取り組み方についてより理解を深めることができた。 ・アンケートでも、それぞれの図書館で実践していくうえで参考になったという意見が多かった。 ・プロジェクターの照度が足らず、スクリーンが見にくかった。

講演「機会をフル活用するPR～連携で広げよう図書館の輪～」

瀬戸内市民図書館　館長　嶋田学氏

利用者を増やすために図書館ができること、何ができるか、何をすべきか。利用者を増やすということは「貸出を増やす」ことではない。まず、固定ユーザー（顧客）を逃がさないようにするということを考えたい。リピーターの利用実態（居場所利用、自学自習、資料利用、行事参加）を再認識し、それぞれの満足度を要素ごとにブラッシュアップしていくことが必要である。新規利用者をどう増やしていくか。「図書館」の本質的機能と役割を問い直し、届けたい。蔵書がどのくらい幅広く、質・量ともに充実しているか、蔵書構成も含めて自己点検することも図書館の魅力を高め新たな利用者を獲得することにつながる。行事を行う際は目的、評価ポイントを持って臨むことが意義を確認する上で必要である。

広報活動の考え方として、４つの理念（『広報・PR 概論』日本パブリックリレーションズ協会編、2010 年）を確認しておきたい。①事実に基づいた正しい情報を提供する、②ツーウェイ・コミュニケーションを確保する、③「人間的アプローチ」を基本とする、④「公共の利益」と一致させる、である。情報発信の中身である「取り組み」（サービス内容や行事）の受け手はどんな人なのか知りたい（セグメント）。誰に伝えるか、場所、コミュニティなど、つながり属性を意識して広報したい。発信情報の素材要素（サービスや行事）の伝達だけでなく、そのサービスや行事が受けた方にとってどういうものを手渡すことになるのか、内容的な背景や本質をうまく伝えられれば、より参加の動機が高まるのではないか。

紙媒体の力はまだまだ大きく、ポスターやチラシを丁寧に作成し、効果的に掲示、配置することが重要である。非来館者への広報では図書館ホームページを活用した発信は期待値が大きい。Twitter や Facebook などの SNS のページを持つ図書館が増えてきた。話題性や若年層の情報ソースとして積極的に取り入れ、情報の拡散につながるよう取り組みを進めたい。その他、広報誌、パブリシティの活用（プレスリリース）、連携先の広報・人脈・口コミの利用、また普段行っているサービス・行事開催が広報活動であり、公共的関係づくりになる。

「図書館法」第 3 条で集会行事について規定されている。実施した行事が、図書館機能のアピールや普及に貢献できたか振り返り、次の企画サービスにつなげ役立てたい。目的、ニーズ、内容、開催日時・場所、連携先、成果について振り返りをすることが必要である。

子どもたちの読書活動を支援する上では、学校図書館の力が大きい。学校図書館の司書が活動を展開しやすい支援の在り方が重要である。公共図書館での当該地域の歴史や文化について興味関心を持てるような行事は、地域郷土資料の重要性と同様、その地域の図書館でしか取り組めない重要なアプローチである。学芸員との連携も含めて、積極的に企画することが望まれる。

図書館行事が単に人集めや賑わいをもたらすものとして企画されることは、図書館活動の本来的な役割や使命から外れてしまう。利用者の実態を知る広報活動や行事が新たな視点での選書、蔵書構築につながり､図書館の本質的機能を向上させる循環を行事や広報活動で高めていきたい。図書館にある本や情報で主体的に学ぶ、主体的に生きる、そういうシーンを増やす。個人の自立を支えることに役立つ図書館になる。そのための図書館行事や広報活動に結びつけていきたい。まだ利用者とはなっていない市民が、図書館に足を運ぶようなプレゼンスを意識して、図書館の蔵書世界や空間性の利活用についてもアピールし、図書館の味方を増やすつもりで、多様な情報チャネルを活かして図書館をアピールしていきたい。

事例報告「図書館ＰＲに必要とされる視点～普通に当たり前を伝える～」

沼田市立図書館　奉仕係長　星野盾氏

分科会のテーマである「利用者を増やすこと」は目的ではない。大切なことは、効果的に図書館や学校図書館としてのサービスを果たすことだと思う。「利用者を増やすこと」は必ずしも目的ではなく手段なので、意識してやっていきたいと思う。

沼田市立図書館では、沼田市のFacebookのページに、コミックスの糸綴じの様子などの日常業務や蔵書点検の様子を動画で載せている。動画再生の6割は県内、残りの4割は全国の人である。日常的な業務の動画は非常に好評で、通常図書館に来ない利用者からの「いいね」もいただいている。広報の目的は「価値観の共有」だと考えている。自分の業務の目的を30秒で説明できるか。言葉で説明ができないと話にならない。同じ内容の事業でも、図書館としての役割に照らしてきちんと意味があるかを言葉にできるか否かが大切で、目的がしっかりしている事業かどうかで違ってくる。

広報で一番大事なものは対話である。双方向の情報交換や言葉のやりとりは大事で、最も情報が集まるのは図書館の窓口だが、利用者以外の人とも対話をしていかなければならない。議員や市町村長、課長、学校長などへの営業を行い、まずは使っていただく。中身をわかっていない人間が業務について語ることができない。最近では各部署から様々な依頼が来ている。図書館で待っているのではなく、出掛けて行って対話をすることが大事である。

続いて、できるだけメディアの露出を広げることが大事である。露出度を増やすことで、これまで図書館とかかわりのなかった人との関係が生まれると考える。

最後に、普段の図書館の業務を理解してもらうことが非常に重要である。外から見ると、図書館は利用するだけのツールでしかなく、図書館をつくることの大変さがわからない。その部分を理解して広報することが大切だと考える。「対話」「露出」「経常性」の3つが図書館の本質的な広報の核になる。言葉で短く伝えられるか、ということが大切だと考えている。

事例報告「地域と大学をつなぐ場として～図書館でこんなこともやってます！～」

群馬大学総合情報メディアセンター中央図書館　専門職員　柘植久美子氏

群馬大学総合情報メディアセンター（以下「センター」）では、2013年にラーニングコモンズ「アゴラ」を整備した。当時の広報はセンターのWebページ、Twitter、館内・学内のポスター掲示のみであったが、2016年4月に中央図書館にギャラリーを開設し、このことがセンター広報の転機となった。ギャラリーを地域との交流の場とするため、展示や企画に力を入れ、学生、教職員、学外の認知度を高めようとした。

広報手段はインターネットとアナログの2つに分かれる。インターネットの基本はセンターホームページへの掲載だが、同じ情報を全学ホームページやFacebookにも掲載し始めた。全学のホームページやFacebookに情報を掲載することで、それまで図書館ホームページを見なかった教員や学生が図書館のイベント情報を知ってくれるようになり、Twitterのフォロワー数も2013年4月のアカウント開始時の253人か

ら、現在 1487 人まで伸ばすことができた。フォロワーの約半数が本学学生であるが、Twitter の第一のターゲットは SNS に慣れ親しんでいる学生なので、運用はうまくいっていると思う。対してアナログの中心はプレスリリースである。事務局の広報担当に依頼して県内メディアに告知し、近隣自治会には回覧板の配付を依頼している。ほかにもセンター1 階に 70 インチの館内電子掲示板を設置するだけでなく、キャンパス内のメインストリートに屋外 A 型掲示板を置き、図書館を利用しない学生、教職員にもイベントを周知している。

まだ試み段階であるが、メルマガも始め、登録者にイベント・企画をお知らせしている。さらに、センター広報誌「総合情報メディアセンターNEWS」を年 4 回発行し、学内配付するほか、研究成果を公開するシステムである群馬県地域共同リポジトリ「AKAGI」でも公開している。

これまでの企画広報の成果としては、メディアへの積極的な告知により学生、教職員や一般市民の認知度も上昇しているが、図書館利用者の劇的な増加にはつながっていない。学生の参加が多いイベントには学外者が少なく、学外者の参加が多いイベントには学生が少ないことも課題である。今後はイベント・展示の PDCA サイクルを実施し、「イベントや展示をやっているおかげで、利用者が増えた」と言える客観的なデータを示せるようにしたいと考えている。ギャラリー展示、ミニレクチャーなど一見図書館と関係ないことでも企画実施して、地域と大学をつなぐ場になることを目指していきたい。

事例報告「高校図書館における小さな工夫—広報を中心に」

群馬県立玉村高等学校　学校司書　織茂真紀子氏
群馬県立伊勢崎興陽高等学校　学校司書　新井玲子氏

群馬県立玉村高等学校（以下、玉村高校）は、生徒数 207 名の小さな高校である。生徒の貸出冊数は、過去 4 年で半分以下に減ってしまった。狭い図書館だが、少しでも居心地のよい空間を目指して、机やカウンターを撤去するなどしてスペースの確保に努めている。月 1 回発行の図書館報「Library」は、学内の行事や出来事に合わせた図書の紹介だけでなく、イベントの報告や生徒とのやりとり、他メディアで紹介された記事の掲載など、生徒が興味を持ってくれそうな身近な内容を、写真を中心に作成している。年に 1 回、「読書週間のおすすめ本」を発行・配布し、朝読の時間に読んでもよいことにしてもらった結果、かなりの数の生徒が読んでくれた。また、図書館は、３年生がほとんど通らない場所に位置しているため、全生徒・教職員が通る階段前に図書館の掲示板を設置した。誰もが目にする位置にあるため、教員や来賓からも反響がある。そのほか、学校行事の文化祭に合わせてブックツリーの作成、授業時間内でのビブリオバトルへの参加、授業で製作したボックスアート作品の展示と関連図書の展示も図書館で行っている。先生の言葉は生徒により響きやすいと思われるため、先生の理解を得ることも大事だ。とにかく色々と試してみることが大切だと考えている。

群馬県立伊勢崎興陽高等学校（以下、興陽高校）は、農業系の総合学科の高校で、男子は 2 割強という女子の多いにぎやかな学校である。図書館は、渡り廊下を通った先の多目的棟の 2 階という教室から離れたところに位置している。多目的棟の 1 階の掲示板には、通る生徒の目を引くよう大きなポスターを中心に掲示している。雑誌「ch FILES」や東宝とのタイアップを利用して興陽高校の名前が入ったポスターの掲示、ロゴマークや折紙を使ったウェルカムボードの作成など、生徒の関心を引くよう様々な工夫をしている。また、図書館が遠すぎるため、管理棟の 1 階にも図書館スペースをもらい、図書委員のオススメ本の掲示や、新刊図書の展示、「空想科学図書館通信」「MORGEN」等の雑誌を置いている。そして、他のたくさんの配付物に紛れないように、図書館通信は絶対に手書きにしている。図書館通信では、利用案内は重視せず、先生のお薦めの本

を中心に掲載している。先生の名前を大きく載せると、本に興味のない生徒も先生の名前で興味を持ってくれることがある。貸出冊数は徐々に伸びてはいるが、県平均の5.2冊にはまだ届かない状況である。何かのついでに寄ることがない分、「図書館に何かある、何でもある」と思って足を運んでもらえるように、工夫を続けてゆきたい。

パネルディスカッション

嶋田学氏をコーディネーターとして、パネルディスカッションを行い、事例発表者に対し下記のような質疑応答がされた。

Q：市のFacebookが立ちあがった時から図書館の情報を掲載しているのか、もしくは検討した結果か。またその成果はどうか。

星野(公共)：検討した結果、市の頁に載せることになった。市の頁に載せることで他部署の情報を求めてきた方の閲覧も期待できる。特に図書館は撮影した動画を投稿しており動画は頁の一番上に表示されるため他部署に比べて閲覧数が多い。動画については職員の作業風景を撮影し投稿している。事務量は多いがそれが核となりサービスとなる。図書館は利用者へこのようなサービスを提供している。それを言葉で短く伝えることが重要だと考えている。

Q：多様なイベントや展示を行っているがその企画は誰が決めたか。またその狙いは何か。

柘植(大学)：主にセンター長が企画を立案している。また、学生と一般の方が互いに興味関心を持ってもらうことを狙いのひとつとしている。ギャラリー展示については、学内で作成した物と学外で作成した物を展示しており互いに見るきっかけとなる。

Q：平成25年度の生徒一人あたりの貸出数に対して、平成29年度の生徒一人あたりの貸出数が減少しているが、その要因は何か。

織茂(高校)：一クラス減ったことが要因のひとつである。また、小・中学生の時から図書館で借りて見る習慣がない生徒が増えてきたことや、朝読で自分で購入してきた本を使う生徒が増えたことが要因だと考えている。

Q：図書室の場所が恵まれていないという状況を改善するにあたってどのようなことをしたか。

新井(高校)：当校には、図書の配列がおかしく分類表示もないため図書を探しづらい、図書館だよりがなく広報をしていない、雑誌架が半分以上空いている等の問題があった。まずは生徒が探せるような図書館にしようという目標の下、図書の配置替え、分類の表示によりわかりやすくした。次にさらに生徒に足へ運んでもらうために広報展開をした。

Q：ネットにアクセスできない人をどうするか。

星野：投稿している動画だけが広報の全てではない。コミュニケーションをとることが重要であり、日々の窓口や移動図書館で子供とのコミュニケーションを積極的にとっている。

Q：LINEやTwitterを活用して生徒たちにアピールしているか。

織茂：あくまでまだ計画段階だが、希望する生徒に新着図書案内メールを送るといった方法を取りたいと考えている。

Q：アナログとデジタルでの広報展開をどのようにしているか。

柘植：図書館の情報を意図的に得たい人とそうではない人がいるため、双方へ向けた展開が必要だと考えている。情報を得たくない人も目に入る回覧板、情報を得たい人しか見ない新聞の告知記事を利用している。また、大学の公式Twitterに情報を出すことで、大学公式Twitterをフォローしているが図書館には興味がないという生徒もタイムラインに流れることで目に入る。

参加者の声（アンケート結果）

図書館大会に参加した方々から、御意見をいただきました。なお、ご意見は紙面の都合で編集してあります。

（1）記念講演について

・固い話かしらと身構えていましたが、気さくで楽しく、興味深く、勉強になりました。高崎の書店を紹介し、招いてくださったのもよかった。
・森田さんの話は大変良かったです。若いのにここまで考えて行動できるって素晴らしいですね。気力も体力もある年代です。ぜひ志を高くもって、多くの人に例示を示して、伝えていって、多くの人の心を揺さぶって、ひとりひとりにとって素晴らしい人生になるように導いていってくださることを願います。
・自立できずにいる人の支援こそ行政のすべきことだという言葉にはっとさせられました。
・森田先生のお話の中に、たびたび「記憶」という言葉が出てきたのが印象に残った。地域の人の記憶に残る図書館でありたいと思った。
・図書館に関することに限らず、地域資源を有効利用し、上手に連携させることで、有効な取り組みができることを感じました。
・とても良い刺激をもらえた講演でした。「多くの人の道標になる例示」「大事なものを見つける旅」など印象的な言葉があり、これから図書館としてできることを実践する手がかりをもらいました。
・大変学ぶことが多かった。図書館員としてだけでなく、行政に携わる者として、地域の住民として、日本国民として考えさせることの多い講演でした。御代田には先進的かつ活動的なお手本のような方（しかもそれを積極的に発信しておられる方）が多く、地方のあり方としても学ぶことが多いのではないかと思う。
・経歴を交えながらの本の紹介や図書館づくりについてお話があり多くのことを学ぶことができた。
・例示のプロになりたいと思いました。
・図書館は何のためにあるのかについて、とても考えさせられるお話でした。
・「アクションの連鎖」本棚に空きの空間をつくることで、まだ本を置けるという心の余裕が生まれてくるといったところが感心しました。その他、要求論（市民側）・価値論（図書館員）の釣合いや「感じるままに生きなさい」という考え方や湯田川での取り組みは心温まりました。
・最近の新しい図書館の構造やありかたについて学べたのでよかったです。
・大変興味深く、楽しい話術で、とても良かったです。いくつか紹介のあった本を読んでみようと思いました。機会があったらまた聞きたいです。

（2）第１分科会について

・実際に本を手にとれる図書館だからこそ、棚での見せ方、手に取ってもらう努力が必要だと改めて感じました。数ではネットに勝てないというのがまさに現状であり、しかし血の通った選書や展示はリアルだからこそ提供できるのだと気付けたことはとても良い機会であったと思います。
・講師の方のていねいなインタビューは温かみが感じられて、私もこんな場をつくりたいと思いました。今まで一度も図書館に来たことがないとか、「本を開いたのは４，５年ぶり」という利用者さんに本を見ていただけるように頑張りたいと思いました。
・ワークショップが面白く、楽しんで見させていただきました。本にあまり興味がないという方でも手に取るような本棚のつくり方が少しわかったような気がします。
・これから学校現場に出たときに生かすこともできると思いました。

・図書室ですと、本にこだわりがちですが、「棚や制服から入るのもあり」というお話が目からうろこでした。
・実物のブックトラックで見られたのでわかりやすかった。
・サンプル本棚作成者の方の意見が聞けたのがうれしかった。
・以前テレビで見て、会いたいと思っていた幅さんの講演を聞けて大変うれしかったです。中学校の司書として子どもたちにどのように本を紹介したらいいのか悩んでいたので、よい機会になりました。
・NDCにこだわらない本棚がおもしろかった。

（３）第２分科会について

・図書館で待っているのではなく、自ら外へ出て営業をしていかなければいけないと改めて感じることができました。
・嶋田さんは、数々の図書館勤務を経ている。図書館を建てるために計画をよく練っている町は、きちんとしたビジョンを持っている館長が在籍していることがわかった。
・嶋田さんのバイタリティあふれる語りに引き込まれました。参考となる取り組みが多かったです。
・公共図書館の核心に迫る話も原点を見つめなおす機会となった。高校の発表（小さな工夫の積み重ね）もとても参考になりました。
・たくさんの質問があり、活気のある分科会でした。
・広報は、単に情報を伝えるものでないことや、その目的をはっきりさせることが大事だと分かりました。イベントについてもやりっぱなしにならないように等、参考になるお話を聞けて大変有意義でした。

（４）全般（大会全体、記念講演や分科会）について

・業務の都合で、午前中のみの参加となってしまったのが残念です。素晴らしいイベントを企画していただいてありがとうございます。
・うちの図書館は人員と予算が限られているので他の図書館にはできないが、やれることからやっていくしかないと思いました。とりあえずチラシ配布はこまめにやりたいと思いました。
・事務局の皆さま、大変お世話になりました。充実した研修の機会となりました。
・午前、午後ともテーマ設定が良く、とても充実した、内容の濃い大会でとても良かったです。
・とても実り多い講演会でした。ぜひまた参加したいと思いますので、よろしくお願いいたします。
・図書館で働く、非常勤の方も出やすいように、1 日でたくさんのことをするのではなく、分科会は日時を分けてやったらどうか。
・森田さん、幅さん、瀬戸内の嶋田館長という豪華なメンバーで素晴らしい企画だと思います。分科会もどちらに出ようか迷いました。今後ともよろしくお願いいたします。
・魅せる本棚を通して、棚に並べる側、見る側の立場で話ができたことが良かったです。図書館員ではないが楽しめました。
・とても有意義な一日でした。準備等の関係者の皆様、ご苦労様でした。ありがとうございました。

（５）今後取り上げてもらいたい企画（記念講演講師、分科会の講師・テーマなど）

・驚かせてください。思いもよらぬテーマ、嬉しいです。
・タイムリーな内容、図書館の進むべき方向性を考えたり、学んだりできるような講演。
・図書館のレイアウト、レファレンス能力の向上、資料の修繕方法。
・図書館で、「有料のサービス」を実施するという点に関する調査や企画など。
・公共図書館向けのお話がたくさんあるとうれしいです。
・話題の作家さんのお話や対談など。
・「図書館のつどい」などのようなイベントが行われると盛り上がって楽しいと思う。

第1 5 回　群馬県図書館大会　報告書

発　行　日:　平成３０年２月

編集・発行:　群馬県図書館協会©